

## まとめ

聴覚・言語障害教育研究部

佐藤 正幸

「聴覚障害理解のための教材開発とそれを活用した授業」の研究を進めた結果、3つの知見が見いだされた。それは、1.音ときこえ 2.絵本、ビデオなどの教材 3.聴覚障害のある本人についてである。

### 1.音ときこえ

これは一般的に音とは何か、つまり聴覚の働きという知識の側面から始まることが多い。なぜ、これらが聴覚障害理解のために必要かという点、1つは現在の社会は音 聴覚中心の社会であること、もう1つはこの音 聴覚中心の社会において聴覚障害のある子ども及び成人が、音声がききとれず、情報不足で不便を感じていることを考えるためである。

大崎先生は、音ビデオ「音いっぱいだけど聞こえにくいんだよ」を作成し、子どもの身の回りには様々な音があり、それが意外ときこえにくいことを体験してもらいながら、聴覚障害のある子どものきこえについての授業を行った。一方、田原先生、宮内先生は、聴覚障害のある子どもが自分自身のきこえを知り、クラスの児童に自分自身のことについてのどのような話をしていくかを事前に学習する際に、音・聴覚の働きに触れている。

### 2.絵本・ビデオなどの教材

これまで、聴覚障害理解のために作成された絵本、ビデオのほとんどは聴覚障害のある子ども・成人のきこえ、補聴器などに関するものであった。今回、研究協力者らによって作成された教材の多くは、きこえ、補聴器に関するものは少なく、聴覚障害のある子どものコミュニケーション、ハンディキャップさらにはそれらが原因となる心理的葛藤を題材としたものであった。

鷲尾先生によるビデオ教材づくりでは、きこえ、補聴器の紹介はもとより、実際に聴覚障害のある成人を出演させ、「サッカーしようよ」という話題についてのどのような話しかけをすれば相手と通じあえるのかを検討し、一連の流れを寸劇形式で構成している。

田原先生は聴覚障害のある「ももこ」を主人公に作成した絵本「ハートはなにいろ」のよみきかせを行い、「ももこ」がきこえなくて困っていること、どのような話しかけならよくわかるのかということ具体的に指導している。

宮内先生は、ことばの教室の紹介ビデオを聴覚障害のある子ども本人と一緒に作成し、その子どもが在籍する学級の子どもたちにみてもらおう試みを行った。また、発音、ききと

りにくい言葉、きき間違えたり、きき返したりしてもいやな顔をしないで欲しいというような内容を盛り込んだ紙芝居も作成した。

### 3. 聴覚障害のある本人について

聴覚障害のある本人について様々な角度から考えてみることは、今回の一連の研究成果において共通してみられた課題であった。聴覚障害の一般的な知識については、本などの資料に数多く取り上げてあるものの、それぞれの聴覚障害のある子どもについての資料は事例研究でもない限り、特に取り上げられることは少なかった。

このことについて、中瀬先生は、教材開発にあたっての検討項目の中で、聴覚障害理解のための「特設の授業」を設定するのではなく、実際の学級における聴覚障害のある子どもとの日々のかかわりそのものが、担任教師として一番の「教材」と成り得るとしている。さらに、学級に聴覚障害のある子どもが在籍する場合において留意することの1つとして教師が一般論として提示する聴覚障害のある子ども像と目の前の級友としての聴覚に障害のある子どもの現実の姿との「ギャップ」から生じる影響を取り上げている。すなわち、聴覚障害理解の授業を行うにあたっては、それぞれの聴覚障害のある子どものきこえ方、言葉の感じ方、受け止め方などは異なることが、聴覚障害の一般的な知識を考える際の大きな課題となることを指摘している。

それらに関しては、それぞれの研究協力者によって個々の聴覚障害のある子どもについての具体的な授業実践がなされた。

まず、授業の前にどのように自分のきこえ方、コミュニケーションについて話したらわかりやすいかなど、聴覚障害理解のための教材作りを聴覚障害のある子ども本人と一緒にやっていることが特筆される。これは、実際には紙芝居やことばの教室紹介ビデオという形でなされた。

次に、授業の中で実際に聴覚障害のある子ども本人が自分自身のきこえない（聴覚障害）ことについて話す、それに対して質問を受けて答えるといった形で実施された。さらには、難聴学級もしくはことばの教室を知ってもらうために、朝の会などを利用して行われる実践もみられた。